

令和6年度 第2回 横須賀市文化財専門審議会

議 事 録（抄録）

日 時 令和6年（2024年）10月2日（水）

場 所 中央図書館郷土資料室、自然・人文博物館 学習室1

参加者 文化財専門審議会委員 〈敬称略〉

委員長 平田大二 : 地質 神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員

委員 相澤正彦 : 絵画 成城大学名誉教授

勝山輝男 : 植物 神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員

剣持輝久 : 考古・郷土史 赤星直忠博士文化財資料館館長

正垣孝晴 : 地盤工学・土木史 元防衛大学校教授

西川武臣 : 古文書・歴史資料 横浜開港資料館館長

安室知 : 民俗 神奈川大学大学院歴史民俗資料学科研究科

矢島國雄 : 考古 明治大学名誉教授

（欠席）瀬谷貴之 : 彫刻 神奈川県立金沢文庫主任学芸員

（欠席）水沼淑子 : 建造物 関東学院大学名誉教授

事務局：生涯学習課長 杉山賢一、同主査 川本真由美、同担当者 佐藤佑吏

中央図書館郷土資料室：主査 谷合伸介、会計年度任用職員 佐藤明生

博物館運営課：学芸員 藤井明広、同 瀬川渉、同 萩野はな、再任用 亀井泰治

内容 〈敬称略〉

1. 視察

（1）絵図「聖徳太子絵伝」「蓮如上人絵図」「顕如上人絵図」（中央図書館郷土資料室）

・相澤委員の解説により、資料を実見した。

相澤：室町時代の絵画であると推測され、指定候補に相応しいと考える。聖徳太子絵伝という聖徳太子の一生が描かれているものであり、聖徳太子先徳連座像という名称がふさわしいと思うが、実物の上段は聖徳太子が嵩じた絵があり、下は斉明天皇を供養したという聖徳太子の考養像が描かれている。こうしたことを踏まえれば、（本絵図も）聖徳太子絵伝と呼称してもよいかもしれない。

浄土真宗ではインドから親鸞まで続く高僧像と聖徳太子をセットにしたものが定番として描かれ日本全国に存在するが、神奈川県ではこの1例のみである。このよう

な絵は本山本願寺からは異端とされ描かれなくなるが、当地に残っておりとても貴重なものである。

もう一方、蓮如と顕如、これは確実に（浄土真宗を）統一していくなかで全国の寺院に自分の画像を下付したものである。

本願寺は、絵を下付するときに裏書をつけるため、年号が判別できることがあるが取れてしまっている事例も多い。実際にこれも取れていると思われる。

本絵画における一番の問題点は修理をしていないことである。よくここまでこの状態で保っていたと感じた。開けないものに関しては、（現状、中が判らないため）表装師と一緒に開けてから、修理か指定か考える必要がある。

佐藤明：この絵図は、市史編纂のときに再調査のため、最宝寺から一括で市に借りたものである。現在、市に寄託されている。

委員長：修復は必要か。

相澤：必要である。かなり慎重に行ったほうがよい。絹なので紙よりも時間とお金がかかる。

事務局：修復の費用はどのくらいが見込まれるか。またその仕上げはパネル状に平面にしたほうが保存上よろしいのか。

相澤：一点 800 万円前後くらいかかるのでは。修復の仕上げ方法は、軸装である。文化財の修復ならば、元のように掛け軸の形に仕上げるのが望ましい。

委員長：この資料の重要性の根拠を示したほうがよいと考える。その後の展開については、また別の判断基準があるとは思いますが、この絵画は価値があるものだと示したほうがよい。

事務局：そこに関しては、相澤先生にその調査をお願いしたい。

西川：県指定になるレベルなのか。

相澤：聖徳太子絵伝なら、県指定の可能性はある。調査を進めてみたい。

（最宝寺寄託のほかの掛け軸の箱を確認。親鸞聖人の墨書がある箱の中の軸を開けたところ絵画ではなく文字が表装されていた）

これは、裏書である。大事なものなので、お寺で過去に表装したのだろう。

親鸞聖人の御影はどこか別があり、聖徳太子絵伝のものか親鸞聖人御影のものか、い

ずれにれにしてもこの裏書がないと本山との関係がはっきりしないため、重要なものである。

(2) 絵図「一本家本浦賀村絵図」(自然・人文博物館)

- ・事務局より経緯を説明後、西川委員と藤井学芸員の解説で資料を実見した。

事務局：既に市の指定文化財である。今年度から開始する浦賀奉行所跡発掘調査の参考資料ということで本日、実見を設定した。奉行所の建物割り付け図はないが、敷地の拡張の様子を示したものである。浦賀奉行所跡の発掘調査では、こうした絵図面類も含めて調査していきたい。

西川：奉行所が話題になるのはペリー来航以降だが、それ以前も東京湾の物資流通の船を観察するのが浦賀奉行所の役割であった。文化元年くらいから船が入ってくるため、極めて重要な資料である。

浦賀奉行所跡の現地は、もう社宅(住友重機械工業株式会社)は建っていないのか。

事務局：現在、跡地は広場になっている。

委員長：いつごろから発掘調査を行うのか。

事務局：調整中だが、調査中に審議会が開催できるように調整する予定である。期間は3か月間を予定しており、国庫補助事業である。

西川：これに合わせて、博物館で展示というのは行うのか。

事務局：今年度は想定していなかった。来年度も発掘調査を検討したいので、次のタイミングに博物館と相談したい。

委員長：全国的にこういう絵図は残っているのか。それとも横須賀特有のものなのか。

西川：村絵図レベルでは、国絵図を作るときに首都圏のほとんどで作っている。重要拠点のこういう場所だとまた別に作成するが、現在まで残っているかという話になると貴重である。

委員長：なぜこの地図が作られたか、1687年から1800年と200年かけて絵図が描かれているというのは幕府との関係などが背景にあるのか。

西川：奉行所の支配地である浦賀町の「土地利用図」と「周辺の道」を描いたものになると
思われる。

委員長：幕府でこのような図面を管理する部署があったのか。

西川：勘定奉行が該当する。勘定奉行の配下に浦賀奉行所が設置されていたためである。江戸城にこれと同じようなものがいくつかあったと推察される。ただし、町奉行関係以外の記録というのが関東大震災で焼けてしまっている。そのため、現地に残っているものが極めて重要であることは間違いない。

藤井：一本家は西浦賀の名主の家である。資料は合わせて 50 点ぐらいということでやや少ない。ほとんどが絵図類であり、全体の鳥瞰図的なものと奉行所の敷地周辺を描いたものがある。それぞれがどういう意図で作成されたか分からないことや、それを保管するような行政文書また日記などが残っていないので、これらをどのように説明するかという周辺の書類が欠けている。

正垣：先ほど鳥瞰図と仰っていたが、これは現在の海岸線とは合うのか

西川：内湾は現在と合うと思われる。

剣持：当時はこういった絵図を描く絵師がいたのか

西川：村の名主クラスは、地図を出さないといけないので、自身で描けてしまうと思われる。
その後、明治 10 年代になると陸軍と内務省が測量に基づいた地図を作るようになるため、こういったものは見られなくなる。

視察終了後、解散